発行／独立行政法人国立病院機構岡山医療センター　2006.05.　Vol.1　No.1

Information magazine

ザ・ジャーナル!!

2006.05
Vol.1_No.1
創刊号

“やさしさ便り～岡山医療センターの今”

URL　http://www.hosp.go.jp/~okayama/　E-mail　info@okayama3.hosp.go.jp

ごあいさつ●－“人にやさしい病院”をめざして－・院長 ―― 2.3
診療科・看護部紹介●This is our hospital ―― 4
ジャストナウ● わが病院の光るワザ! ―― 8
シリーズ●岡山医療センター物語　第１話『敷地内全面禁煙の編』 ―― 11
病院活動案内 ―― 12

写真　小児外科外来で診察する院長

―人にやさしい病院― をめざして

―Human Friendly Hospital―

基本方針

1: 患者さまにやさしい病院を目指します

2: 病院で働く人にやさしい病院を目指します

3: 地域の人にやさしい病院を目指します

運営計画

1 ： 患者さまにやさしい病院になるために

1） 安定した経営基盤の確立

2） 医療の質の向上

3） 患者さまの権利と尊厳の保障

4） 病院運営方針の公開と周知実行

5） 環境の整備、充実

2 ： 病院で働く人にやさしい病院になるために

1） 楽しく働ける環境づくり

2） 健康に働ける環境づくり

3） 教育、研修の充実

4） 職員相互の親睦を深める

3 ： 地域の人にやさしい病院になるために

1） 公開講演会の開催

2） 地域教育会の開催

3） 公開催しものの実施

4） 地域の人との親睦、交流会の開催

5） 医療による国際貢献

ごあいさつ ―“人にやさしい病院”をめざして―

岡山医療センター　院長　**青山　興司**

この度、ザ・ジャーナル ―‘やさしさ便り―岡山医療センターの今’― を発刊する事になりました。これは今までの広報誌‘Just Now’と‘岡山医療センター便り’を1本化して皆様のもとへお届けするものです。これにより、我々岡山医療センターが、‘今、何を考え、何をしているか’を迅速に、具体的に皆様にお知らせする予定です。

この創刊にあたり、本院の理念と方向性について述べさせて頂きます。

理念は、‘人にやさしい病院’を目指して行こうというものです。我々の病院は1991年にUNICEFから先進国では世界で初めて‘Baby　Friendly Hospital:赤ちゃんに優しい病院’の称号を戴きました。

それ以後、本院は母乳保育を中心とする赤ちゃんに優しい病院を維持してきました。一昨年4月より、独立行政法人国立病院機構岡山医療センターとして新たな門出を迎え、赤ちゃんのみでなくすべての人にやさしくという意味を込めて‘Human Friendly　Hospital:人にやさしい病院’を目指して、を理念としております。

病院は患者様あってのものですから患者様が主体であることを認識し、患者様に優しくある必要があります。患者様への優しさを維持するためには経営基盤がしっかりしていなければなりません。残念ながら我々の病院は独立行政法人になる前からの多額の借金を抱えており、これらをすべて返しながらの経営をせまられております。この返済計画に沿った返済は絶対的なものです。しかし、どのような状況においても、我々は利益追求型病院を目指すのではなく、医療の質の向上に努め、患者様の権利や尊厳の保障に努力し、患者様に分かりやすい医療提供の出来る開かれた病院を目指す必要があります。また、患者様に良い医療を提供するためには、そこで働いている人が幸せ感をもっていなければ達成出来ません。そのためには健康で楽しく働ける職場つくりが必要です。同時に職員相互の親睦を深めるために、レクレーション（盆踊り大会、ボーリング大会、忘年会など）も必要でしょう。また、我々は専門家として患者様に対して特殊技術を提供していることを忘れてはなりません。そのためには教育、研修は必須のものであり、それには時間と経費をかける必要があります。更に病院の存在が地域の人にも喜んでもらえるものでなくてはなりません。そのため、公開講演会、地域教育会、地域交流会などを通じて地域の人達と交流を図る事が必要です。

また、社会貢献の一つとして、国際協力も柱の一つとして考えて行いたいと思っております。

以上の事を踏まえ、最近の2年間で行ってきた事を列挙してみます。

①回転ドアの撤去と2重ドアの設置、②小児用プレイルームの新設、③夜間用エレベーターの新設、④職員用アメニティー施設の整備、⑤面会室の新設、⑥医局の増設:30名用、⑦看護師用ロッカールームの増設、⑧総合周産期母子センターの設立（MFICU:6床新設）、⑨NICUの増設（9床から15床へ）、⑩セカンドオピニオン外来の設置、⑪在院日数の短縮（19日から14日へ、）⑫手術数、33%の増加、⑬返済計画にそった、年間約20億円の借金返済、⑭医師の増員:35名、⑮看護師の増員:142名、⑯地域医療連携室の充実、⑰携帯電話の解禁、⑱顧問弁護士の雇用、⑲1年に4回の宿泊研修会の実施、⑳看護学校学生数の増員（19年度から1学年40名増員）など多項目に渡っています。特に私が就任当初から‘花と笑顔の病院’を目指して始めた、院内の主要部署（病棟、個室病室、外来など）に生け花をいける、ことがアシスタントナースの協力により、ずっと絶える事なく続けられていることは本当に嬉しく思っております。しかし、敷地内全面禁煙は未だ進まず、外来待ち時間の対策など不十分で改善せねばならないことが多く残っています。

今後も理念にそって、より良い病院を目指していきたいと思っておりますので宜しくご指導のほどお願い致します。

最後になりますが、谷崎眞行副院長が本年3月をもって退職し、瀬戸内市病院管理者へ栄転されました。4月より三河内弘が副院長に就任致しましたので宜しくお願いします。

現代新事情

ジャスト ナウ

JUST

わが病院の"光るワザ"

小児医療編

小児医療の動向

小児科　山内芳忠

従来、小児医療は、子供と疾患を横断的に、しかも縦断的に見ることの出来る唯一の分野であり、他の診療科とは異なる特色を持ち、大きな魅力でした。さらに治療技術の進歩により難病の子供たちも小児、学童期、思春期をすぎて、そして結婚、妊娠、出産にいたるケースも増え、そのために胎児、新生児から成人までライフサイクルを視野に入れた医療体系が必要との事で、成育医療の概念が確立されました。現在、小児医療は、少産少子社会の中で、しかも新しい研修制度の影響もあり小児科医師をめざす人達がすくないようです。その一方、現在の社会環境の下、小児科医師の役割はますます増大しているのも事実です。各施設の小児科は、小児科のセンター化、総合的医療施設としてのこども病院、さらには総合周産期母子医療センター構想の整備が進められています。同時に規模の小さい小児科は、小児科医の減少と不採算性などのため縮小や閉鎖を余儀なくされ、今や小児医療の集約化、機能分担は避けられない状況です。今後は、各施設での特色を核とした施設内での統合的チーム医療から他医療施設、地域保健や行政などとの連携やネットワーク構築のもとに、子供たちの成長と発達を視野に入れた総合的な医療・保健の確立と充実に取り組む事が必要でしょう。小児の病気を治すには小児の心身を健全に育成することが必要です。子供たちの心への対応は、大きなテーマで、しかも緊急の対策を必要としています。不登校、非行、これに関連する育児不安、核家族、育児困難からの虐待の問題などがあげられます。最近は、治療面に加え、育児支援、健診、予防接種などの予防医学を含む母子支援、家族支援の医療に変わりつつあります。そのため、心の診療部やこころの発達診療部を立ち上げる施設もでてきています。このように小児医療は、医療面ばかりでなく、子供たちを社会人として育て、見守る役割も担っています。出産・育児にやさしい環境、赤ちゃんにやさしい病院の推進活動、そして教育や地域保健の現場にももっと小児科医師は、関心をもち積極的に関わる時がきたようです。

小児科　小児科　福原信一

当院小児科は30年以上前から、24時間小児患者を断らないことを基本方針として診療を行っております。年々時間外における小児救急患者は増加の一途を辿り、昨年度は約1万2000人の診療を行いました。このうち紹介患者は約400名、救急車による搬入は約300名、入院患者は約1000名を数えました。スタッフは代謝、内分泌、神経、感染症、アレルギー、血液、腎、循環器などの専門分野を持ち中国地方の1次から3次まで診療している一般病院としては最も広い診療範囲を有し、高次医療への対応可能な臨床病院として地域医療に貢献しています。また小児外科も常時オンコール体制であり、外科疾患へ対応し緊急手術なども行っています。激増する小児時間外患者・小児救急医療の変化に対する取り組みとしては、受付順がそのまま診療順になる

NOW!

私たちは進化しつづけます

のではなく海外や首都圏の一部で行われている緊急度や重症度に応じた診療順序・対応を行うトリアージシステムを取り入れるため講演会などを開催し、重症患者の病院間搬送も可能な限り行っています。小児救急医療への医療者側のニーズにこたえるため昨年度は第1回小児救急医療研修会を2日間に渡って開催し、中四国から約100名の医師・看護師・救急隊員に受講していただきました。

地域における国立病院機構の急性期病院として、「かかりつけ医」の先生方との連携を図りながら小児救急医療へのより良い体制づくりを目指しています。

小児外科　小児外科　岩村喜信

当科は、0歳から15歳まで（中学生以下）の外科的疾患を扱う科です。原則的に高校生になると外科が担当しますが、小児外科と外科とでは年齢だけでなく病気そのものが異なることが多いため、こどもの頃からの病気を高校生以上になっても引き続き小児外科で診療することもあります。対象臓器の範囲としては、脳・脊髄（脳神経外科）、骨・関節（整形外科）、心大血管（心臓血管外科）以外の広い範囲の臓器の手術を行っています。当科で手術を行っている主な疾患を次に示します。

1. 顔面・口・頚部:副耳、舌小帯短縮症、正中頚嚢胞、側頚瘻、梨状窩瘻、リンパ管腫
2. 胸部・呼吸器・横隔膜:漏斗胸、肺嚢胞、肺分画症、気管狭窄、気道異物、横隔膜ヘルニア、横隔膜挙上症
3. 食道:食道閉鎖症、胃食道逆流症、食道異物
4. 胃・十二指腸:肥厚性幽門狭窄症、胃軸捻転、新生児胃破裂、胃十二指腸潰瘍、十二指腸閉鎖症
5. 小腸・大腸:先天性腸閉鎖症、腸回転異常症、メッケル憩室、腸閉塞、ヒルシュスプルング病、急性虫垂炎、腸管ポリープ、クローン病、潰瘍性大腸炎
6. 直腸・肛門:鎖肛、肛門周囲膿瘍
7. 腹壁・臍:鼠径ヘルニア・陰嚢水腫、臍ヘルニア、臍帯ヘルニア、腹壁破裂

小児病棟の、広く生まれ変わったプレイルーム。保育士さんも常駐しています。

現代新事情

ジャスト ナウ

JUST NOW!

わが病院の"光るワザ"

小児医療編

私たちは進化しつづけます

8. 泌尿生殖器:水腎症、膀胱尿管逆流症、尿道狭窄、尿道下裂、包茎、停留精巣、精巣捻転、副腎性器症候群、膣閉鎖症、卵巣嚢腫
9. 悪性固形腫瘍:神経芽腫、腎芽腫、肝芽腫、横紋筋肉腫

2005年は、約550件の上記手術を行い、そのうち最も専門的とされる新生児手術は22件、悪性腫瘍手術は9件行いました。術中はもちろん、術前・術後も当科所属医師が責任をもって診療に当たります。当科は、小児外科指導医1名、小児外科専門医3名をはじめとした小児外科専属医師により、24時間体制で上記の診療に当たっています。当科では、当科発足当時から所属研修医には新生児科・小児科（小児内科）の研修を必修としており、小児をトータルに診ることができるような小児外科医の育成にも力を入れています。

新生児科 新生児科　中村　信

わが国の周産期・新生児救命率は世界でもトップクラスの成績です。これは戦後の復興の中、半世紀にわたる先人の努力により得られたもので、私たちが世界に誇るべきものの一つです。特に小さく生れた赤ちゃんたちの救命率は諸外国と比較しても大変良好です。出生体重が2500g未満の赤ちゃんを低出生体重児、1500g未満を極低出生体重児、そして1000g未満を超低出生体重児といいます。いまでは多くの超低出生体重児たちが全国の各新生児集中治療室（NICU）で救命されています。全国的にみても超低出生体重児の8割は救命されます。岡山県では毎年約50名程度、1000g未満の赤ちゃんが出生しますが、昨年（2005年）は当院新生児センターに入院した21名の赤ちゃんたちの救命率は100%でした。このように私たちの国、私たちの県では小さい赤ちゃんたちを助ける努力が続けられてきましたが、救命率があがることによってご両親と私たちにとって目標は変化してきました。救命する医療から、救命を前提として赤ちゃんたちが「どのように幸せな人生を送ってゆくか」までを視野に入れた医療へと変わってきているのです。もちろん後遺障害を残さず救命することが大事です。しかし、病気とともに生きていく子ども達や家族にとって暮らしやすい世の中を作ることも必要です。このためには病院の高額医療機器や治療技術だけでなく、日本全体を子育てのしやすい国にする努力が必要になります。このような観点からは、わが国は先進国とは言い難いのが現状なのです。私たちを含めて全国で周産期医療に関わる人たちは、医療者としてこの大きなテーマの中でどのような役割を果たせるか自問しながら日々赤ちゃんたちと向き合っています。このような観点から最近では当院のNICUでも患者さんである赤ちゃんたちとご両親の絆をより深めるためにカンガルーケアやディベロプメンタルケアなどの試みも積極的に取り入れています。

新企画!!

シリーズ 岡山医療センター物語 第1話

NO SMOKING

『岡山医療センター敷地内全面禁煙の編』

岡山市田益に住む田益一郎(仮名)は、風邪気味で少し熱があるので、午後6時過ぎに岡山医療センターを受診することになった。

一郎『救急は確か二階だったなあ。自家用車で行こう。』一郎はタバコを一服して、エンジンを始動させた。一郎の家から、医療センターまで1キロもないが、医療センター入り口から、建物の中までは500mくらいあり、歩くと結構あるので、いつも自家用車で行く。日頃は、車で通勤しているが、家では妻や娘がタバコ臭いとうるさいので、車の中が唯一喫煙できる場所である。一郎が医療センターのゲートを入ると、『敷地内全面禁煙』の看板が目に入った。『ここも禁煙か』、一郎はあわててタバコの火を消した。

救急外来に着くと、大勢の人が待っていた。救急車も入ってきた。

一郎『いつまでかかるんですか？』と聞くと、看護師さんが、『今、救急車が入ったから、30分くらいあとね』とのことだった。一郎は、急にタバコが吸いたくなった。『どこでタバコが吸えますか？』と聞くと、ガードマンの人が、『敷地内禁煙』と繰り返すだけだった。救急の二階の駐車場の自分の車の陰で、そっとタバコを1本吸って、吸殻を溝に捨てた。

救急で自分の番が呼ばれた一郎は、横井師長(仮名)に『タバコ臭いけど、どこで吸ったの？駐車場も禁煙よ!』と言われた。

ドクターKにもその会話が聞こえたらしく、ドクターKは風邪薬の処方とともに、一言『駐車場の溝に、一日何十本ものタバコが落ちていて、その掃除が大変なんだよ、我々従業員が交替で、禁煙パトロールをしているんだ。禁煙外来もあるんだよ。』と言った。一郎はちょっと、自分が悪い気がした。でも、禁煙はむずかしい!

2005年4月から岡山医療センターは敷地内全面禁煙となりました。それまでは、喫煙場所を院内に設置していました。

しかし、病院は社会においてヘルスプロモーションを推進する立場から、全面禁煙とし、従業員も患者さまも病院内では禁煙を守るということを宣言したわけです。

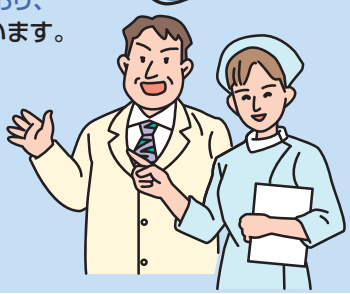
註：この物語は、登場人物は架空のものですが、実際に起こった事実を基に再構成したものです。毎日の禁煙パトロールにもかかわらず、敷地内全面禁煙は、なかなか達成が難しい状態が続いています。"妙案"を思いつかれた読者の方は、編集チームまでご一報ください!

(臼井記)

禁煙パトロール

禁煙外来について

診療日時／毎週水曜日　午後2時～4時＜予約制＞



WHO(世界保健機構)は、「世界で年間約500万人が喫煙により命を奪われており、タバコは病気の原因の中で予防できる最大で単一の原因である。」と報告しています。
当院でもタバコを止めたい人の相談窓口として、禁煙外来を開設しております。

原則的に自費診療(保険外診療)

診察料は、初診料4,050円、再診料720円(消費税別途負担)です。
ニコチンパッチやニコチンガムを利用される方は、別途実費が必要です。
受診を希望される方は、主治医または禁煙外来窓口にご相談ください。

担当／精神科・心療内科　清水義雄・三宅聖子

[病院活動案内]

地域医療研修センター　セミナー・講演会（5月～7月）

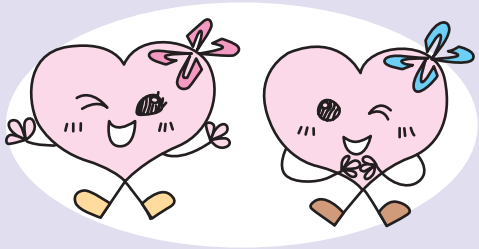
会場/当院4階大研修室　時間/19:30～20:30

日　程	種　別	演　題／内　容	演　者
5月16日（火）	初期治療セミナー	他科の先生方のための 泌尿器科の知識　ー血尿をみた時はー	当院泌尿器科医長　津島知靖
5月25日（木）	講演会	医療事故を起こさないために	岡山県医師会参事 平野隆茂先生
6月20日（火）	初期治療セミナー	切らずに治る 放射線ヨード治療 ーバセドウ病の最新の診断と治療	当院総合診療科　大石徹也 当院外科　臼井由行
7月18日（火）	初期治療セミナー	「糖尿病性ケトアシドーシスで 入院後腎不全をきたした1例」	当院糖尿病･代謝内科 肥田和之
7月27日（木）	講演会	サクセスフル エイジング	大阪市立大学医学部生化学･ 分子病態学教授 井上正康先生

●ネーミング&キャラクター決定●

応募期間が短かったにもかかわらず、病院内外から多数の御応募を頂きまして誠にありがとうございました。担当者一同、感謝の気持ちで一杯です。応募作品はと言いますと、お子様が一生懸命考えて書いてくれた可愛らしいものからコンピュータグラフィックスを駆使した素晴らしいものまで幅広く、選定にはかなりの時間を要しました。その中から広報誌のネーミングは「ザ・ジャーナル!!"やさしさ便り～ 岡山医療センターの今"」、メインキャラクターはかわいいハートの形をした"ハートちゃん"に決定致しました。惜しくも今回、メインキャラクターに選ばれなかった作品も、これから随時サブキャラクターとして登場してくるかもしれないのでお楽しみに。

（藤田　記）



●日本医療マネジメント学会岡山地方会報告●

平成17年10月より、日本医療マネジメント学会岡山地方会が発足し、事務局が当院地域医療連携室におかれることになりました。第1回地方会総会ならびに学術集会は、平成18年2月25日（土）に、当院にて開催されました。一般口演、クリパス展示、特別講演、シンポジウムの4部構成で、予想を超える約230名の参加者を得て、大変盛会のうちに全日程を終えることができました。特別講演では、「病院経営を歴史に学ぶ」と題して、昨年の第7回学術総会会長であった国立病院機構九州医療センター院長、朔　元則先生にお話いただき、参加者一同深い感銘を受けました。また、シンポジウムは「地域医療連携の現状と今後の展望」をテーマに、尾道市立市民病院副院長の山脇泰秀先生をゲストにお迎えし、岡山県内4病院のシンポジストからの現状報告を踏まえて、活発な意見交換が行われました。今後の岡山県の地域連携のあり方を探る上で大変有意義な討論であったと思われます。第2回学術集会は、岡山済生会総合病院院長　糸島達也先生を会長に、平成19年2月24日に開催予定です。（大森　記）

編集者から●あとがき

今回、広報誌を刷新するにあたって、院内のすべての職域から編集チームを募り、最終的に9人の"熱い"メンバーでスタートすることになりました。職員全員の思いだけでなく、岡山医療センターを支えてくださっている地域の皆様、患者様の心と息遣いにいたるまでお伝えできるような、自由で、溌剌とした紙面づくりを目指したいと考えています。素人ばかりの編集チームのため、試行錯誤の繰り返しで、読者の皆様からお叱りを受けること必定ですが、「私たちはかわった」あるいは「かわろうとしている」ことをご理解いただけるよう、メンバー一同、精一杯頑張ります。暖かく、長い目で育てていただければ有難く存じます。

（大森　記）

ザ・ジャーナル!!
第1巻第1号
平成18年5月1日発行（年4回発行）
編集責任者　大森信彦
独立行政法人 国立病院機構
岡山医療センター 地域医療連携室
広報誌編集チーム
〒701－1192　岡山市田益1711－1
Tel.086-294-9911 Fax.086-294-9255